

イギリス・ロマン主義における太平洋表象のかたち： コールリッジとバイロンの『島』

石倉和佳

1. クックの死と太平洋

ロマン主義文学の作品が、太平洋を舞台に展開することはほとんど見られない。18世紀のヨーロッパでは太平洋を文明に穢れていない楽園と見る空想的理解が広がったが、それはすぐに幻滅へと転化した。ロマン主義の時代は太平洋に対する幻滅と忘却の時代でもあり、この時代の文芸にみられる太平洋表象はほとんどが断片的で、海が描かれる場合においてもそれは地理的に特定されない場合が多い。ジェームズ・クック (James Cook, 1728-1779) のハワイにおける死の後、クック隊によってもたらされた北極圏のラッコなどの海洋生物の生息の報告は、北極海での大量捕獲の引き金になった。一方でタヒチ周辺の島々に生育するパンノキを、奴隷の食べ物の候補としてウィリアム・ブライ船長 (William Bligh, 1754-1817) が採取に向かった。太平洋航海でもたらされた毛皮や食料資源の情報は、その後瞬く間にヨーロッパの人々の知るところとなり、ハワイでは白檀が消滅に向かい、海洋生物の資源は大いに乱獲された。

キャプテン・クックがハワイ島での暴動の中で殺された事件は、同時代の人々に強いショックを与えた。詩人のウィリアム・クーパー (William Cowper, 1731-1800) が、クックによる三度目の世界一周探検航海の公式航海記を読み、彼がハワイ島で殺害されたことについて次のように述べている。

キャプテン・クックの死について私が思わずにはいられなかった一つの考えほど、私により暴力的な衝撃を与えたものはなかった。神は妬む神であり、ハワイ島においてかわいそうなこの男は崇拜されることに満足していた。その瞬間から、彼に向けて際立つ神の力が介入し、彼の目的をすべて妨害する反対の方へと転換したのである。

No observation however forced itself upon me with more violence than one, that I could not help making on the death of Captain Cook. God is a jealous God, and at Owhyhee the poor man was content to be worshipped. From that moment, the remarkable interposition of Providence in his favour was converted into an opposition that thwarted all his purposes. (Oct. 9th, 1784, To John Newton: Cowper, 282)

現在では詩人として名を残しているクーパーは、イギリス国教会の聖職者であった。S.T.コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)は軽妙でかつ聖職者らしい彼の散文を「聖なるおしゃべり」(“the divine Chit chat of Cowper,” *CL* 1, 279)と評したが、クックを語る書簡にはそうした雰囲気は影を潜め、教会での説教に似た運命論的な響きが見られる。彼はクックが嵐に会い船の損傷のためハワイに引き戻されたあと、何もかもがちぐはぐになってしまったことについて次のように述べる。

島を立ち去ったとき、彼は神格化された自分に陶醉する崇拜者達をあとに残しており、であるから彼に仕える用意があるはずであった。島に戻った時、それらの人々は不機嫌で、信頼がならず、怪しげな印象があった。軽微な盗みがあり、盗まれたものが返却されたあとも盗んだ者を探すといった間違いを犯し、それは最後の重大な現場での状況を悪化させるものともなった。何らかの不幸によって皆に好まれていた一人の首長が殺された。結局、クックには失策と間違いが取りついており、それは彼が息も絶え絶えになって水の中に倒れこむまでは続いたが、その後すべてが平穏を取り戻したのである。

When he departed, he left his worshippers still infatuated with an idea of his godship, consequently well disposed to serve him. At his return, he found them sullen, distrustful, and mysterious. A trifling theft was committed, which, by a blunder of his own in pursuing the thief after the property had been restored, was magnified to an affair of the last importance. One of their favourite chiefs was killed too by a blunder. Nothing in short but blunder and mistake attended

him, till he fell breathless into the water, and then all was smooth again. (Oct. 9th, 1784, To John Newton: Cowper, 282-83)

クックは原住民がいる島では、首長と友好を結び庇護を受けて上陸するという形を基本的に取っていたが、ハワイは複数の島々からなるため権力構造が複雑で、そのことが突発的な暴動を引き起こしたと考えられる¹。一方的に神格化されることは、ハワイでのクック隊の優位性を無条件で保証することにはならなかった。最初に寄港してから数か月後に戻った間に、ハワイには梅毒などの疫病が流行り始めていた。そうした災いをもたらしたとしても、武器を持ち優位に立つ人々を親切に送り出すしぐさは、最後であるから意味のあることであったかもしれない。その後マストの損傷のために再度戻ってきたクック隊には、ハワイに数多くいる首長やその下に仕える男たちのすべてを制圧する魔法のような力はなかったのである。

クーパーのクックの死についての文章は、公式航海記が出た同時代のものとして重要なものであり、1780年代には人々のクックによる太平洋航海への関心が強かったことを示している。そして興味深いのは、クーパーの記述は現在に至るまでこの事件について何らかの見識を与えるものとなっていることである。文化人類学においてハワイのロノ神信仰を用いて彼の死を説明する場合も、イギリス海軍の乗組員の士気や連携の不如意を問題にする場合も、クックの意図することがすべてを妨害する神の力、すなわち人知では計り知れない力が働いたという説明に包含されると考えることもできるからである²。クックの死はイギリスの海洋覇権および植民地主義の展開に、何らかの象徴的な影を落とすものとして現代では語られている。そしてその影を最初に体現した一つとして、同時代文学を見ることも可能である。同時代のイギリスにおいて太平洋が積極的に語られないことで、クックの死の象徴性も長く秘匿されることになった。

ブライの航海はバウンティ号の反乱(1789)を引き起こし、この事件は太平洋を舞台とした物語としてその後語り継がれることになる。反乱の首謀者であったフレッチャー・クリスチャン(Fletcher Christian)の行方について、本国イギリスでは19世紀初頭まで様々な憶測が飛び交った。密かに帰国しているのではないかという噂も流れたが、1810年にタヒチから2千キロ以上東のピトケアン島に反乱者とその

子孫が住んでいることが報告され、その後フレッチャーの死も伝わった³。それ以降イギリス国内で話題となり長く記憶されるような太平洋の出来事はほとんど見当たらなくなる。アメリカ大陸北西部を探索したジョージ・バンクーバー (George Vancouver, 1757-1798) も、オーストラリア大陸を初めて周回したマシュー・フリンダース (Matthew Flinders, 1774-1814) も、同時代にその業績に値する正当な称賛など受けなかったのである。彼らの作った地図はその後の太平洋の地理を明確にするものとなったが、それは彼らの努力と能力の高さを示すものであっても、20世紀になるとイギリスの植民地主義を補強するものと理解されることが多くなっていく。

本稿では以下、ロマン主義期における太平洋への関心と関連する作品について、同時代の出来事に関する考察とともに、S. T. コールリッジと G.G. バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の著述や作品を通して検討する。

2. コールリッジとコツェブーの航海記

コールリッジの「老水夫の歌」(初版 1798 年)は、詩の冒頭の散文で航路が説明され水夫の船が太平洋をさまよったことが書かれている。その航路は、かつてフランシス・ドレイク (Francis Drake, c.1540-1596) が世界一周をした時の太平洋に至るまでの航路と同じものである。この詩の本文には特に太平洋の出来事であると明示された地理的情報は現れないが、キャプテン・クックの航海記に記述された海洋の不可思議な現象が書かれており、具体的な海洋の描写を通して太平洋を航海する物語として読むことができる。この詩はワーズワスとの共著、『リリカル・バラッド』(Lyrical Ballads)の巻頭を飾り、その後改訂が幾度も加えられることとなった⁴。改訂では地理的な情報は特に追加されず、コールリッジは古バラッドを模した綴りや用語のアルカイズムを排し、政治性を読み取りうる部分を消去し、野趣が度を過ぎて臭みと感じられるような表現を抑制するなどの修正を行っている。また、1817年の詩集『シビルの詩編』(Sibylline Leaves)では、詩の横に「グロス」(gloss)と呼ばれる散文の簡潔な説明が加わり、新プラトン主義に基づく詩の解釈をグロスの話者に語らせている。このような改変を経て、太平洋の大海原であるはずの海は、現実の航路と船を操る人々の現在性を取り払った超自然的空間となった。

コールリッジ自身が生涯に残した太平洋に関する記述は少なく、ここで取り上

げるコツェブー(Otto von Kotzebue, 1787-1846)の航海記についてのコメントなどは珍しいものである。『リカル・バラッズ』から、『シビルの詩編』が出版されるまでの期間はナポレオン戦争期であった。この時期イギリス海軍は自国の航路を保全し敵国のルートを遮断し物資を輸送するなど、海上における防衛と敵国の動きを制圧するのに忙しくしていた。このような戦争の時代には、世界一周航海と太平洋の物語が人々の空想と興味を掻き立てた時代の記憶は次第に消し去られていった。代わりにイギリスの人々に伝えられたのは、次々と送り出された太平洋への宣教師たちの活動の報告である。1800年代にコールリッジの友人ロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1743)が執筆した書評の中には、キリスト教各宗派の宣教師による報告を題材としたものがいくつか含まれている。コールリッジはイギリス海軍関係の航海記や太平洋に関する旅行記などを特に熱心に読んでいたわけではないが、サウジーの書評や宣教師たちの報告からタヒチやハワイの現況について知ることになったと考えられる⁵。

コツェブーの航海記(*A Voyage of Discovery, into the South Sea and Beering's Straits in the Years 1815-1818*, 1821 以下『航海記』)は、ドイツ語で書かれた原著が出されたのと同じ年に英語の翻訳が出版された⁶。英語版については翌年に『四季評論』(*The Quarterly Review*)に書評が掲載され、おおむね好意的に受け入れられた。コツェブーはバルト海に面する現在のエストニアで生まれたバルト・ドイツ人(Baltic German)であり、父のアウグスト(August Friedrich Ferdinand Kotzebue, 1761-1819)は、著名な劇作家でロシアの外交官やエストニア地方の行政長などを歴任した人物である。コールリッジは1821年から翌年にかけてコツェブーの『航海記』を読み、ノートにその内容と感想を書き付けている。『四季評論』にはおそらく目を通していたと考えられるが、ドイツ語の原著には触れていないようである。なお、この『航海記』に描かれた世界一周の探検航海は、コツェブーがロシア帝国艦隊の海尉として遂行したものであり、地理的調査と北西航路の探索が主な目的であった。

コールリッジのノートには、『航海記』にあるいくつかのエピソードが短く記述されている⁷。アラスカの西端の現地の首長たちが鏡に特段の興味を持った様子や、緑で覆われた島が氷塊であることが分かり、その氷の中にはマンモスの歯や骨が

埋まっているといった話である。彼がノートに書いた内容は、全体でみると40ページにわたる箇所の内容を短く再編集したものであり、凝縮されている箇所も翻訳をそのまま写している箇所もある。コールリッジのノートの記載は省略部分があるため、ここではコツェブーの『航海記』本



Otto von Kotzebue, *A Voyage of Discovery* (1821), frontispiece. "Portrait of Inhabitants of Kotzebue Sound"

文からコールリッジが書き写した内容の中で、特に彼が考えさせられたと思われる部分を見ていくことにする。当時スペイン領であったアメリカ大陸北西部のカリフォルニア地方に、コツェブーの一行が立ち寄った際の描写の箇所である。コールリッジの関心は宣教師と現地の人々、そしてキリスト教の布教がもたらす影響であった。コツェブーは宣教師たちが現地語を学ばず、したがって現地の人々との意思疎通が難しいことを疑問に思い、現地の人々はスペイン語を理解できないままだで見える作法をまねているだけではないかと怪しんでいる。

野蛮な部族の人々を改宗させることへの怒りは、今や南太平洋全体に広がっており、多くの悪影響を生み出している。それというのも宣教師たちは、それらの人々をキリスト教徒にする前に人間にすることに骨を折らず、そのために幸福と平穏をもたらすはずのものが血みどろの戦いの元となっているのである。例えばトンガ諸島では、キリスト教徒と異教徒とが相互に相手を皆殺しにすることを試みているといったように。

The rage for converting savage nations is now spreading over the whole South Sea, and causes much mischief, because the missionaries do not take pains to make men of them before they make them Christians, and thus, what should bring them happiness and tranquility, becomes the source of bloody wars; as for

example, in the Friendly Islands, where the Christians and heathens reciprocally try to exterminate each other (Kotzebue, 1, 280)

トンガ諸島 (Friendly Islands) に初めてロンドンから宣教師が送られたのは 1797 年であるが、布教活動は 2 年も続かず内紛や現地民との争いがおこり死者も出たと記録されている⁸。その後、1820 年代に新たに宣教師団が訪れ、トゥポウ I 世 (King George Tupou I, 1797-1893) のキリスト教改宗 (1831) 以後国家統一が進んだ。宣教師たちが現地の風習や伝統的思考方法などを理解せず、キリスト教的道徳や倫理観を押し付け、彼らに対する保健衛生上の配慮を怠ったことは多くあったと考えられる。こうした状況は他の太平洋の島々の多くで同様であった⁹。

カリフォルニアでキリスト教を教えるカトリックの宣教師たちは、現地の人たちが愚鈍で教えることが困難だと説明したが、コツェブーは教えることに骨を折らないからではないかと観察している。そして宣教師の所に留まっている現地の人々は、内陸の地域から自発的にやってきたのだ、という説明は疑わしいとも思っている。キリスト教に改宗した人々が、そこでの生活に慣れずにすぐ死んでしまうことも付け加えているが、何故死を選ぶことになるのか。コツェブーは次のように語る。

年に二度、彼らは生まれ故郷に帰る許可をもらう。その短い期間が、彼らが生きている間の最も幸福な時なのだ。そして私は、大勢で大きな声で喜びながら故郷へ帰る人々を実際に見てきた。その旅路につけない病気の人々は、船に乗る浜辺までその幸福な同郷の人々にせめてはとついて行って、そしてそこで一緒に何日も座り込むのである。彼らの故郷の村を囲む遠くの間山の頂を悲しそうに眺めながら。彼らはしばしばそうやって何も食わずに何日もすごすのだが、このように失った故郷の眺めがこの新しいキリスト教徒たちの心をゆさぶるのである。許可をもらった人々の幾人かはいつも逃亡してしまう。そしてもし、彼らを捕まえ宣教師のところへ犯罪者として連れて帰る兵士たちを恐れて引き留められなければ、全員がそうするのだらう。

Twice in the year they receive permission to return to their native homes. This short time is the happiest period of their existence; and I myself have seen them

going home in crowds, with loud rejoicings. The sick, who cannot undertake the journey, at least accompany their happy countrymen to the shore where they embark, and there sit for days together, mournfully gazing on the distant summits of the mountains which surround their homes; they often sit in this situation for several days, without taking any food, so much does the sight of their lost home affect these new Christians. Every time some of those who have the permission, run away; and they would probably all do it, were they not deterred by their fears of the soldiers, who catch them, and bring them back to the Mission as criminals ... (Kotzebue, 1, 283-284)

このような状況がキリスト教を学ぶものに強いられるとすれば、それは奴隷の状態と変わらない。カリフォルニア地方の先住民を労働力に変えることを目途とするのであれば、キリスト教はここでは植民地支配の体裁の良い道具のように機能していることになるだろう。コールリッジはこの部分をノートにほぼ正確に書き写している。

アメリカ北西部の原住民の人々の境遇を知り、コールリッジが複雑な心境になったことは推測できる。ここに描かれた人々の様子が、コールリッジがケンブリッジ大学の学生であった時に書いたギリシャ語のオードの内容と通じるものがあるからである。「西インド諸島の奴隷たちは、死を彼らの生まれ故郷への旅券だと考えている」(“The Slaves in the West-India Islands consider Death as a passport to their native Country.”)と、コールリッジは後年このギリシャ語の詩の要旨を説明した。そして、冒頭の詩行を次のように英語の散文で再構成した。

死よ、お前は確かに恐ろしいが、お前は自由と共に住まう。厳かな守り神よ。広がる大海の上をお前の暗い翼に連れられて、彼らは生まれ故郷へと戻る。そこにはシトロンの茂みの下、泉の湧き出るところで、恋人たちが愛する人に告げている。人であることの恐ろしさを人から耐えてきたのだと。

Thou [the Death] are terrible indeed, yet thou dwellest with LIBERTY, stern GENIUS! Borne on thy dark pinions over the swelling of Ocean they return to their native Country. There by the side of fountains beneath Citron Groves the

Lovers tell to their Beloved, what horrors being MEN they had endured from MEN! (*PW* (R) 1, Part 1, 222)

若いコールリッジの奴隷の境遇を思うヴィジョンの中には、彼らの故郷は柑橘類の香り漂う森を持つ楽園であったという記憶がある。死と楽園が背中合わせになったこの詩の境地はコールリッジの詩の中でも独特のものである。死が故郷への旅券だというセンチメントへの共感、奴隷の心に寄せた個人的な情感として読めばよくわかるものである。死後魂が精霊となり故郷に帰っていくというイメージに事寄せれば、神に祈る心とも通じるだろう。

コツェブーは1823年から26年にかけて太平洋航海を行い、その記録は1830年に英訳されて『新航海記』(*A New Voyage round the World, in the Years 1823, 24, 25 and 26*)として出版された。チリで出会った船長から聞いたというピトケアン島の話も加えられたもので、コールリッジは出版後すぐ目を通して読んでいる。この書の中には、太平洋の島々での英米の宣教師の行動が強く糾弾されている部分がある。コールリッジはコツェブーを批判しているが、キリスト教倫理の浸透が社会を改良するものであると信じていたためであろう¹⁰。彼の理解は疫病による大量死やそのための社会の疲弊など太平洋の人々の健康や文化に関する視点が欠落しているが、この傾向は当時のイギリスでは一般的なものだったと思われる¹¹。なお、『新航海記』に描かれたバウンティ号の反乱者のその後についてのコールリッジの感想などは、筆者の知る限り、残されていない。

3. バイロンの『島』(1823)とその評価—ジョン・バローとジョン・マレー

先にも述べたように、ロマン主義の時代に太平洋が全面的な舞台となった作品はごく少ない。著名な詩人の作としては、バイロンの『島』(*The Island*, 1823)を挙げることができる。ロマン派の詩人たちの詩作の中では太平洋を描いた点で特筆すべきものだろう。この作品は「クリスチャンと彼の仲間たちの冒険」(“The Adventures of Christian and his Comrades”)という副題がついており、ブライ船長が報告したバウンティ号の反乱に関する報告と、ウィリアム・マリナー(William Mariner, 1791-1853)のトンガ滞在記を編集したジョン・マーティン(John Martin)の著作を援

用したものである¹²。

詩には南洋の楽園と大海のイメージが繰り返し綴られ、バウンティ号に乗船していたトーキル (Torquil) と現地の娘ヌーハ (Neuha) の恋人たちが、争いから逃れ島の洞窟へと向かうところで物語は閉じる。登場人物の行動が相互に影響しながら詩全体のドラマ性を展開させる明快なプロット構造にはなっておらず、途中でマリナーの記述に従った南国の島の祭日の香しい様子が描かれ、そのあとでトーキルとヌーハが物語に登場する。バウンティ号の「勇敢な首長」(“The gallant Chief” Canto 1, l.17) であるブライ船長 (William Bligh) は詩の前半で退場し、反乱の首謀者であったクリスチャンについては、「死火山のような気分で立つ」(“stood/ like an extinct volcano in his mood,” Canto 3, ll. 139-140) 黙想の場面やトーキルとの友愛の場面、そして追っ手に追われる連続シーンなど断片的な描写が積み重なり、最終部分で海の中に滑落する。一方で「島の娘たちのひまわり」(“the sun-flower of the island daughters” Canto 2, l.213) と呼ばれるヌーハは、この詩を通して自然の動きと一体となったイメージで語られている。

発表当初から現在まで、『島』の作品評価はバイロン作品の中では高いものではなかった。20 世紀後半に至るまで、わずかの例外を除いて多くの批評家や研究者は、この詩を文明に汚されていない楽園賛美を臆面なく描いたロマン主義詩の残念な事例の一つとして捉え、多くを語ることがなかったといわれている¹³。この作品はそれまで多くのバイロン作品を出版してきた大手のジョン・マレー (John Murray II, 1778-1843) ではなく、出版ベンチャーともいえる雑誌出版者のジョン・ハント (John Hunt, 1775-1848) によって出された。同時代の書評によるこの詩の評価は一樣ではないが、ハントによる出版を揶揄するものもあり、バイロンの韻律が規範に合わない部分があるとして、ハントの弟であるリー・ハント (Leigh Hunt) の文芸作品のスタイル、すなわち「単純であることの見せかけ」(“an affectation of simplicity”) と書評家たちに批判されたやり方を、バイロンが模倣しているとまで書かれている¹⁴。

しかし同時代批評の中には次のようにこの詩について積極的な評価をしているものもある。この書評では、バイロンの詩が人気であるゆえに称賛されるが、じっくり味わって読まれることが少ないと述べ、次のように語る。

その一方で、この並外れた作者がこれまで出版した数えきれない断片的なものの中で、彼が生み出すことができる真の詩的構成の本質を示唆するものが一つあるとすれば—そして我々はいつの日か彼の芸術の輝きとその名が永遠に称えられるように蘇ることを望み期待するのであるが—それがこの詩なのだ。

Whereas, of all the numerous fragments which this extraordinary writer has put forth, if there is one which indicates the true nature of the poetical structure he is capable of raising, and (we are determined to hope and expect) he some day or other *will* raise, to the glory of his art and the immortal honor of his name—it is this [The Island] (“The Island,” *The New Monthly Magazine*, 136)

この評者は第二編にあるヌーハトトーキルの描写を絶賛し、そのあとに続くクレオパトラが言及され辛辣な文明批判が語られる詩行をバイロンらしいスタイルであると評価している。『島』がブライのバウンティ号の事件報告とトンガ滞在記から題材を取っているということは、初版から明記されており、当時の書評もこの詩を実際の事件をたどる形で解説をしている。しかしこの書評では、これらは単に題材であり、バイロンはその題材を自分の詩的構想のなかで活かして書いたと捉えている。こうした好意的な解釈の方向は、しかしその後広がることはなかった¹⁵。その原因の一つと考えられるのが、当時イギリス海軍の重職にあり、同時にジョン・マレーが出版していた『四季評論』(*Quarterly Review*)に数多くの書評を投稿していた、ジョン・バロー (John Barrow, 1764-1848) によるバウンティ号の反乱について書かれた書籍が出版されたことである。

バローの書籍は、1831年に『バウンティ号における反乱と無法な略奪行為についての波乱万丈の歴史:その原因と帰結』(*The Eventful History of the Mutiny and Piratical Seizure of H. M. S. Bounty, Its Causes and Consequence*) という長いタイトルとともに、ジョン・マレー社から出版された。バローとマレーは『四季評論』を通じて既知の間柄であり、バローの著作の出版についてはマレーが監修を行っていたことが伝わっている¹⁶。この書籍には著者名がなく、「编者」(Editor)としてその

著者が様々な記録を合わせて記述したものと示唆されている。バローから見れば、1831年の出版の段階で、バウンティ号の反乱に関係し、何らかの異議申し立てをするかもしれない人々はすべて物故していたことが、この書籍の出版のタイミングとしては好都合だったと考えられる。バウンティ号に乗り、一旦は死刑を宣告されたが、恩赦をうけて解放された一人であり、バローの書籍が出版される直前には存命だったピーター・ヘイウッド (Peter Heywood, 1772- Feb. 1831) も、出版と同年に逝去した。弟であるフレッチャー・クリスチャンを擁護しブライ船長の横暴を糾弾した兄のエドワード (Edward Christian, 1758-1823) も、その他海軍の関係者もほぼいなくなっていたのである¹⁷。北西航路探索の大本営をかけていた当時としては、イギリス海軍の不祥事を海洋のドキュメンタリーに転換させることにも意味があっただろう。バローは手にした多くの資料から様々な情報をおそらく恣意的に選びながら、内容に一定のバランスをつけて配置することでイギリス海軍への批判をそらし、同時に読者を楽しませるための工夫をして、追われた人々が最後に到着したピトケアン島と生き残った反乱者の子孫たちの報告まで行った。ピトケアン島では反乱者の子どもも含めて融和をもって暮らし、反乱者の唯一の生き残りであるジョン・アダムス (John Adams) が、聖書の教えに従い人々を導いている様子が報告されている¹⁸。

その後、この書籍はマレー社からは同タイトルで再版され、同時にアメリカのハーパー社 (Harper) からは翌年 1832 年に、『ピトケアン島とその住人について: バウンティ号の反乱についての信頼できる記述と、その後の反乱者たちの運命について』 (*A Description of Pitcairn's Island and Its Inhabitants. with An Authentic Account of the Munity of the Ship Bounty, and of the Subsequent Fortunes of the Mutineers*) という異なったタイトルで出版される。中身は同じで表紙だけ変えた出版であり、このアメリカ版はその後 19 世紀を通じて同じ内容で、出版社を変えながら発行されている。

この書籍は 8 章で構成されており、1 章から 4 章まではバイロンの『島』からの引用が冒頭につけられている。これだけを見れば、4 章までの内容に対応したバイロンの詩を紹介しているものと受け取ることができ、その他の章にはシェイクスピアが引用されていることから、文学的な味わいを付加したかったのかという印象があ

る。『島』が発表された翌年に亡くなった詩人バイロンを偲ぶ趣向かとも思われるが、序文として添えられた文章には、明らかに本文とは異なる趣旨のバイロンへの言及がある。この序文には、反乱者の生き残りがピトケアン島に住みコロニーを作っている成り行きにはロマンがあり、叙事詩のテーマにもなりうるものかもしれないと述べたうえで、次のようにバイロンの『島』に対する批判的な分析が書き込まれているのである。

バイロン卿は確かに部分的にしかこの主題を取り扱わなかった。二つの一致しない物語を混ぜ合わせ、そのどちらも不完全なままにしてしまい、事実と虚構を混ぜ合わせることで、いつもより巧みなものではなくなった。というのも彼の『島』の多くの美しい詩行は、すべての木や花や泉が詩を呼吸する場所を描いているとはいえ、詩全体としては弱々しく劇的效果に欠けるものである。

Lord Byron, indeed, has partially treated the subject; but by blending two incongruous stories, and leaving both of them imperfect, and by mixing up fact with fiction, has been less felicitous than usual; for, beautiful as many passages in his 'Island' are, in a region where every tree, and flower, and fountain breathe poetry, yet as a whole the poem is feeble and deficient in dramatic effect (Barrow, 1831, x)

バローは『四季評論』に多く寄稿したが、そのほとんどが探検記やイギリス海軍関係の人物評伝、その他海軍にかかわる内容のものが多く、文芸批評には手を付けていない。この引用に現れている主題、二つの物語、事実と虚構、劇的效果といった用語はすべて文芸批評のものだといえるだろう¹⁹。この文章をバローが書いたとは考えにくい、匿名出版であることも併せると、書籍が出来上がった後にマレーがバイロンの詩が引用されているのを知り、こうした序文の内容にしたと推測できる。バローにとってマレーは自分の著述を出版する社主であり、マレーが望んだ内容が自分の著述の序文に入っても意見しなかったと考えられる。

それではマレーはなぜバイロンの作品の評価を下げる序文をつけた書籍を製作したのか。バイロンとマレーの関係は、『ドン・ジュアン』(Don Juan, 1818-24)の

出版を通して難しいものとなり、1822年にはバイロンは出版社をジョン・ハントに変えている。マレーにとっては、『ドン・ジュアン』はおそらく顧客となるミドル・クラスの趣味に合うとは思われず、不道徳でスキャンダラスな作品と考えられたようである。自分の立場を良質で健全な書籍を届ける書籍商と考えたための行動なのか、結果彼はバイロンの出版を引き受けることから後ずさりし、彼の死後は残されたバイロンの『追想記』(Memoirs)を友人たちと話し合った後、自分の出版社の応接室の暖炉で燃やした。1820年代の不況の際には、マレーは詩や物語に対する冷笑的な態度がひどくなったということであるが、そうした原因は主にバイロンとの関係にあるのだろう²⁰。

しかし別な見方をすれば、マレーはバイロンの詩才を本質的に理解することができたのかどうか疑わしい面もある。先に引用した序文では、バイロンの『島』は「二つの一致しない物語を混ぜ合わせ、そのどちらも不完全なままにしまい、事実と虚構を混ぜ合わせることで、いつもより巧みなものではなくなった」というのだが、イギリス海軍の船上で起こった水夫の反乱の物語と、トンガの風物や太平洋の自然の報告が、一致しない物語であるというのは創作の可能性を考えない態度である。また、「不完全」が何を意味するのか定かではないが、事実に基づいた記述にすれば完全であるとすれば、そもそも詩作の意義を分かっているはずではない。そして事実と虚構が混ざり合うことが良くなかったように書いているのは、文芸作品の本質、すなわち想像力によって現実と遠く離れたイメージをつなぎ言語によって新しい情景を生み出す力など存在しないと言っているようなものである。一言でいえば、マレー(本人かこの本の出版社かどちらであるかは措いて)は、文学作品の要諦が十分には腑に落ちなかったのかもしれない。自分が出版しなかったバイロン作品を評価する気にならなかったとしても、バローの本が出てしまえばその後は売り上げを数えるだけで中身については考えることをやめたとも見える²¹。

バローが編集著述した『バウンティ号の反乱』は、1831年の初版の段階から評判になり議論を呼んだ。アメリカ版が普及し、その後20世紀になると、1931年にオックスフォード出版からバローの著者名入りで出版され、長く再版されることになる。これらの書籍には初版の序文と本文が使われた。このような状態になることをバローが予測したかどうかはわからないが、この事実は結果としてバイロンの『島』

の評価を下げることに寄与したと考えられる。バイロンの『島』を称賛した書評はおそらくわずかの人が読んでいないだろうが、20世紀になっても継続して出版されていた『バウンティ号の反乱』を目にした人の数は膨大であり、冒頭の序文にバイロンの『島』が単に紹介されているのではなく批判的に書かれていたのでは、バイロンが最後に残した詩はたいしたものではなかったという意識的、無意識的な印象を多くの人に残したと考えられるからである。

1934年にクラーク・ゲーブル(Cleak Gable, 1901-1960)がクリスチャン役で出演した映画『バウンティ号の反乱』(*The Mutiny on the Bounty*)が公開された。この映画はこの事件を人々に思い出させることになり、同時にアカデミー賞を受賞したこともあり、長く映像作品として視聴されることになった。20世紀前半は、現代のようにバウンティ号の物語について多くの事実と同時代の資料が簡単に手に入るわけではなかった。バローの本はバウンティ号の反乱とは何だったかを知るためにまず手に取るものと考えられただろう。しかし20世紀も半ばごろになれば、この本の著者「ジョン・バロー卿」(Sir John Barrow)について知る人は少なくなり、さらに時代が下ると彼がバランスをとって記録から取捨選択したという内容が、ヨーロッパ優位の植民地主義的古い価値観に彩られているように見えても不思議ではなくなっていた。序文ではバイロンの作品が事実と虚構を混ぜ合わせていることが批判されているが、現代ではバローの著作自体が事実と虚構の間の何とも言えない領域にとどまっているかに見える。

4. 太平洋へのオマージュとしての『島』

18世紀にイギリス人として太平洋を横断し世界一周航海をした一人として名を知られるジョン・バイロン船長(Vice-Admiral of the White, John Byron, 1723-1786)は、詩人バイロンの祖父である。先祖にイギリス海軍の船長がいたことは、彼の作品に海賊や太平洋の島々が登場することと無縁ではないだろう。バイロンはロマン派の詩人たちの中で、もっとも太平洋航海と縁が深い詩人であるともいえる。不思議なことに、バイロンの『島』を太平洋へのオマージュとして読むことは一般的には行われていないようである。しかしバウンティ号もトンガの報告も太平洋を語るための枠組みであると考えれば、どの程度事実在即しているのか等の議論はほとん

ど意味をなさなくなる。太平洋には現在では多くの国家が存在するが、ポリネシアの島々の人々はもともと台湾島や東南アジアから東へとカヌーなどに乗って移住していった人々であり、言語体系や民族的にも共通のものが多い。バイロンがトンガの風習を参考にすることもポリネシアを描く場合特に奇異なことでもない。太平洋は大小さまざまな島が海に抱かれて点在し、クリスチャンら反乱者たちが逃げた島々、すなわちタヒチ(Tahiti)、トゥブアイ(Tubuai)、ピトケアン(Pitcairn)などに近い海域を航海する船は、ただ毎日青く無限に見える海原を行くことになる。そこに現れた島は、人間の運命を繁栄にも滅亡にも導きうる結節点としての場所である。

『島』は実際に起こった事件を題材にしているものの、太平洋を描いた作品として見ると、海と自然が主人公であり人間たちは自然を彩り海に消える刹那の存在として読むことができる。この詩の冒頭、南洋の海に浮かぶ船が夜明けを迎えるシーンから始まるが、反乱者が立ち上がる直前の、星明りと船と風と夜明けの光に染まる瞬間の海が印象深く描かれている。

星々から光が広がり這うように空に忍び込む
空の深みから輝く瞼を開き
帆は今や影の中で白く浮かび上がる
冷たく沸き起こる風ははためき
紫に染まる大海は来る太陽を抱いている
しかし、朝日差す前に、事は起こされねばならぬ。

The stars from broader beams began to creep,
And lift their shining eyelids from the deep;
The sail resumed its lately shadowed white,
And the wind fluttered with a freshening flight;
And the purpling Ocean owns the coming Sun,
But ere he break—a deed is to be done. (Canto 1, ll.11-15)²²

帆船の白い帆が、暗闇の中のかすかな星の光でぼんやり白く浮かび上がっている。船は大海を滑るように走っている。朝日が昇る直前、空に太陽の反射光が混

じり、それが海面に降りて海は紫色に変わる。この光景は神秘的であり、なにかが起こる予感を含んだ描写である。

続くシーンでバイロンは反乱者たちの求める平等な世界を、楽園に似た場所として描いているが、敵と呼ばれる体制側の人々と彼らが思想的に対峙する姿は最後まで描かれない。バウンティ号の反乱という事件が持っていた政治的要素はこの詩の中では雲散霧消してしまうだけなのである。こうした点を捉えて、この詩の中心をもたない構造や断片性が問題にもなるようである。しかし主題を太平洋的なもの、としてとらえなおすと特に問題とも映らない。この詩は一つの波にもう一つの波が重なっていくように、登場人物が現れては消える繰り返しによって成立しているようにも見えるのだが、この詩の主題を海と考えればこうした展開も理解できる。登場する人々は南国の海と島を舞台に現れては消えていくのである。

この詩で最も魅力的な描写は、ヌーハを描くところであるといってもいい。彼女が海を行き巨大な船を見つける瞬間は、次のように描かれる。

波を打つ櫂と踊る舳先を波間に出だして
 彼女は雪を行くトナカイのように
 白波の縁を素早く滑りぬける
 ネレイスの海そりのように軽く
 そして巨大な船体が波間に揺れて持ち上がるのを
 じっと見つめていぶかしがった
 She, with her paddling oar and dancing prow,
 Shot through the surf, like reindeer through the snow,
 Swift-gliding o'er the breaker's whitening edge,
 Light as a Nereid in her ocean sledge,
 And gazed and wondered at the giant hulk,
 Which heaved from wave to wave its trampling bulk.

(Canto 2, ll.228-233)

小舟で波打ち際をすべるように渡るヌーハは、ヨーロッパ船が岸に繋がれている

のを発見するのだが、ギリシャ神話の海の女神ネレイスに事寄せて、「まだ幼子である世界の幼子(“The infant of an infant world,” Canto 2, l.128)」、すなわち文明がまだ発達していない自然に近い社会の中のごく若い人間として描かれている。彼女の存在は、この詩の後半にかけて描かれる世界観を体現するものである。続く詩行では、プロア(proa)と呼ばれるオーストロネシア民族の小舟が描かれ、巨大な西洋の船と小さな帆を立てる小舟の群れをライオンと蜂に見立てている。

錨は降ろされた。船は深海につながれた
太陽を浴びて眠る巨大なライオンのように
その周りをひらひらとプロアが群がっていた
ライオンのたてがみに夏の蜂がブンブンと音を立てるように
The anchor dropped; it [the giant hulk] lay along the deep,
Like a huge lion in the sun asleep,
While round it swarmed the Proas' flitting chain,
Like summer bees that hum around his mane. (Canto 2, ll.234-237)

プロアは太平洋諸島全般で使われたカヌー式の小舟のことで、その形態はさまざまである。三角や四角の帆をつけ、横に転覆防止のアウトリガーをつける場合もある。バイロンがここで描いているのは帆をつけた小舟である。その小舟に乗った人々がうるさく騒いでいる音が、蜂の羽音にたとえられている。太平洋の島々の人々が使う船であるプロアは、もともと東南アジアの船をスペイン人などがプロア(proa)と呼んだことに始まるものである。英語文献では多くはカヌー(canoe)とのみ記述されることも多い。バイロン船長の航海記にも、プロアと呼ばれる船がソロモン諸島探索の際発見したギルバート諸島にあるヌクナウ(Nukunau)島の記述に登場する。バイロン船長がヨーロッパ人として初めて記録を残した島で、そのためしばらくバイロン島(Byron Island)と呼ばれていた。1765年7月4日午後、ココナツの木が生い茂る美しい島を見つけ、バイロン船長のドルフィン号(Dolphin)が近づいて行ったとき、彼は多くのプロア船に囲まれていた²³。

バイロンの『島』は直接ジョン・バイロンの航海記と関係するものではないが、イ

ギリス海軍の探検航海記の記述は、海を行くことが主題であり、その間に会う人々は、ヌクナウ島の人々との出会いのように一期一会である²⁴。また、反乱とその後の反乱者の追跡は、バイロン船長の時代から太平洋の各地で起こっていたヨーロッパの侵入者による経済圏の奪取と現地の人々とのせめぎあいを背景に持っているともいえる。海に人は逃げ込み、そこで争いがおこり、その争いの中から調和のある島の生活が生み出される、という何世紀も前から太平洋で繰り返された人間の移動と定住のドラマを、バウンティ号の反乱の事件から紡ぎだすことは特に奇矯なものとは思われない。人口に膾炙した事件を題材にしなが、太平洋とは海に逃げて島の中に居場所を見つけることで平和で穏やかな (pacific) 場所を手に入れるところだ、というメッセージを読み取ることも可能である。そしてそれらの出来事が刹那のことであったとしても、後半に向かってトーキルとヌーハの二人の出会いとお互いの絆が描かれることで、この詩が推進力を持つことになるのである。バイロンはヨーロッパを描くのであって太平洋ではない、と考えるのであれば、彼が祖父ジョン・バイロンに思いを寄せたこともないことになってしまうだろう。

物語の中のヨーロッパ船に乗る登場人物たちを主人公としてとらえるのではなく、島に現れては消える到来者の群れとしてとらえ、彼らの規律や規範、そして希望などはすべて波間に消えるものとして描かれているのだとすれば、一人反乱者の仲間から外れて南の島の娘と結ばれるトーキルは、自然がもたらす成り行きの中で選ばれた者とも映る。バイロン自身この詩についていくつか書き残しており、「これまでの作品とは違う行き方で書いた」(“not in the same style with my former stories,” Byron, *Letters and Journals*, 117) と述べ、「一冊の本として出すには物足りないが、捨ててしまうには良すぎる」(“not good enough perhaps to publish alone—but too good to throw away” 117-18) とも書いている。何やら不思議な出来栄になったこの作品について、彼自身も一定の愛着を持っていたようである。

(本稿は JSPS 科研費 25K03930 の助成によるものである。)

¹ William Bullock がリバプールで展示したクック隊の持ち帰った工芸品などの展示の説明には、「王のマント」と呼ばれるハワイ原生の鳥の羽で作られた美しいマントを身に着けた首長たちが、クックが殺された騒乱の起こった場所にいと記述されている。クックを友好的に迎えた王とは異なる首長ではなかったかと考えられるが詳細は定かでない。Bullock, 10 参照。

² Sahlins および McLynn, 397-407 参照。

³ クリスチャンについては、現在ではイギリスに帰国することなくピトケアン島もしくはその近辺で死亡したと考えるのが一般的である。その他さまざまな説については、拙稿「死者の漕ぐ船: コールリッジの「老水夫の歌」と太平洋航海」89-91 および注を参照のこと。

⁴ *PW* に加えて、Wordsworth, および Coleridge *Sibylline Leaves* 参照。

⁵ 1802 年以降、サウジーは宣教師の報告書の書評を *Annual Review and History of Literature* や *Quarterly Review* に書いており、タヒチの人々の信仰やその土地に伝わっている考え方などについて記述している。この時期のコールリッジによるポリネシアへの宣教師についての言及はほとんど見当たらないが、サウジーと共同でマルサス(Thomas Roert Malthus, 1766-1834)の人口論(*Essays on the Principle of Population*, 2nd ed., 1803)への批判を投稿することを考えていた際に残したメモ書きに、バンクーバー航海記にあるアメリカ大陸北西部の人々の生活を分析している箇所などを批判的にとらえているものが残されている。1803 年版の人口論には、バンクーバー航海記からの引用も多く利用されているが、コールリッジは「旅行記からのごちゃまぜで楽しませようとする 355 ページの寄せ集めにはうんざりする」、「I am weary of... all that follows to the 355th page may be an entertaining farrago of [...] quotations from Books of Travels...」*CM* 3, 809)と書きつけた。当時出版されていた航海記の類には良質なものが少ないという臆見があったためとも考えられる。詳細については拙稿「バンクーバー航海記(1798)にみる太平洋の人々」を参照のこと。

⁶ コツェブーの『航海記』は出版後すぐに英語に翻訳されたこともあり、英語の翻訳には難点があることも指摘されている。“A Voyage of Discovery into the South Sea,” *Quarterly Review* 365-366 参照。

⁷ *CN* 4, 4841 and 4841n 参照。

⁸ ‘Ahio, 24 参照。

⁹ 拙稿「19 世紀末から 19 世紀初頭のハワイ諸島における病と死—ハワイはいかに語られたか」105 参照。19 世紀にポリネシア各地に派遣された宣教師たちは、病や伝染病は神の怒りを体現した墮落した者たちへの罰と考える傾向が強かった。近代的保健衛生の観点から病に苦しむ太平洋の人々を制度的に救う試みはほとんどなされなかったといえる。

¹⁰ *CL* 6, 1055-56 参照。イギリスの聖書協会で活動していた牧師のヒューズ(Joseph Hughes, 1769-1833)宛ての書簡である。

¹¹ 拙稿「18 世紀末から 19 世紀初頭のハワイ諸島における病と死—ハワイはいかに語られたか」参照。

¹² Bligh および Martin 参照。どちらも出版当時話題になった著作である。

¹³ 『島』のこれまでの批評的評価については、McKusick, 839-42 を参考にした。

¹⁴ *The New-York Review*, 335. Canto 3 における Ben Bunting が登場する部分に対するも

のである。水夫たちの描写が粗いものになっている点については、意図的な部分もあると思われる。

¹⁵ 20世紀になると『島』を評価する研究が出てくる。McGann の *Fiery Dust* (1968)によるこの詩の再評価の後、20世紀末には McKusick, Addison など、これまでの評価を相対化しこの詩独特の要素を重要視する研究が出るようになった。ただし MacCarthy(2002)のバイロンの伝記では、バウンティ号の反乱のストーリーと noble savage の理想化という20世紀の間優勢であったこの詩の消極的な評価を、好意的な筆致で描くに留まっている(445)。

¹⁶ Peale 197 参照。

¹⁷ バウンティ号で下士官たちの反乱が起きたときの状況については、1792年にロンドンで行われた海軍裁判の際に報告されている。*Minutes of the Proceedings of the Court-Martial* 参照。この報告書の Appendix には、反乱はブライ船長の叱責や罵倒が原因であるという主張が、クリスチャンの兄エドワードによって記述されている。バローの書籍はこの資料も利用しているようであるが、エドワードについては明記されていない。

¹⁸ バローのピトケアン島の描写は、島の数十人の人々が子どもを育て学校を作って文化的な暮らしをしているように語られている。これが事実としても長く続いたかどうかは不明である。20世紀半ばに女性への性的虐待が報告されていたが、21世紀初頭には島の男性の多くが同様の容疑で裁判を受けることになった。これは代理で島に派遣された女性警官によって報告され調査隊が送られたことに始まる。“Pitcairn: The Island of Fear”参照。

¹⁹ 序文には文学者であり作家たちの後援も行ったウィリアム・サザビー (William Sotheby, 1757-1833) の名が言及されており、文学的な裏付けをほのめかしているかに見るが、当時すでにかなり高齢であったこのマイナー詩人が何をしたのかは分からない。サザビーによるホメロスの作品の翻訳 (“his translation of the Iliad and the Odyssey” x) が言及されており、その翻訳がジョン・マレー社から同年の1831年に出版されたが、関係は不明である。

²⁰ *Oxford National Biography* にある次の項目を参照した。“Byron, George Gordon Noel,” by Jerome McGann, および “Murray Family,” by Zachs, William et al.

²¹ マレーがバイロンの作品を出版しなくなった時期については、O’Connell, 176-195を参照にした。この頃マレーに対する批判が出版され、そこではマレーにとって詩の優劣はその売上げが最も重要な判断材料であると揶揄されている(188)。

²² 本稿におけるバイロンの『島』からの引用は、*The Works of Lord Byron*. Ed. Earnest Hartley Coleridge からである。

²³ Byron, *Byron’s Journal*, 112 参照。

²⁴ ジョン・バイロンの航海記は18世紀の間に2種類出されており、どちらもバイロン船長自身が記録したものをもとに編集したものである。本人が書いた航海記の写しが1957年に発見され、現在ではそれを読むことができる。18世紀に出されたものが原文を改変したものである点については Byron, *Byron’s Journal*, lxxii-lxxxii 参照。

< Abbreviations >

CL: *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*

CM: Samuel Taylor Coleridge, *Marginalia*

CN: *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*

PW (R) : Samuel Taylor Coleridge, *Poetical Works* (Reading Text)

< 参考文献 >

Addison, Catherine. “ ‘Elysian and Effeminate’: Byron’s *The Island* as a Revisionary Text.” *Studies in English Literature*, John Hopkins U. issue 35 (1995) : 687-706.

‘Ahio, Finau Pila. “Christianity and Taufa A ‘Āhau in Tonga.” *Melanesian Journal of Theology*, 23 (2007) : 22-80.

[Barrow, John]. *The Eventful History of the Mutiny and Piratical Seizure of H. M. S. Bounty, Its Causes and Consequences*. London: John Murray, 1831.

---. *A Description of Pitcairn’s Island and Its Inhabitants. with an Authentic Account of the Munity of the Ship Bounty, and of the Subsequent Fortunes of the Mutineers*. New York: Harper, 1832.

Bligh, William. *A Narrative of the Mutiny, on Board His Majesty’s Ship Bounty and the Subsequent Voyage of Part of the Crew, in the Ship’s Boat*. London, 1790.

Bullock, William. *A Companion to the Liverpool Museum*. Hull: 1808.

Byron, George Gordon. *Letters and Journals ‘A Heart for Every Fate’*. vol.10 Ed. Leslie A. Marchand. London: John Murray, 1980.

---. *The Works of Lord Byron*. Poetry Vol. V. Ed. Earnest Hartley Coleridge. London: John Murray, 1901. <https://www.gutenberg.org/files/23475/23475-h/23475-h.htm> 20260223

Byron, John. *Byron’s Journal of his Circumnavigation 1764-1766*. Ed. Robert E. Gallagher. Hakluyt Society. Cambridge U Press, 1964.

Coleridge, Samuel Taylor. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. E.L. Griggs. Oxford Clarendon Press, 1956-71.

---. *Marginalia*. Eds. H. J. Jackson and George Whalley. 6vols. Princeton UP, 1980-2001.

---. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. 5vols. Ed. Cathleen Coburn et al. Princeton UP, 1957-1990.

---. *Poetical Works I: Poems* (Reading Text). 2 parts. Ed. J. C. C. Mays. Princeton UP, 2001.

---. *Sibylline Leaves: A Collection of Poems*. London: Rest Fenner, 1817.

<https://archive.org/details/cu31924105501773/mode/2up> 20260204

Cowper, William. *The Letters and Prose Writings of William Cowper*. Vol.2, Eds. James King and Charles Ryscamp. Oxford: Clarendon Press, 1981.

Kotzebue, Otto Von. *A Voyage of Discovery, into the South Sea and Beering's Straits in the Years 1815-1818*. 3vols. Trans. H. E. Lloyd. London, 1821.

---. *A New Voyage round the World, in the Years 1823, 24, 25 and 26*. 2vols. London, 1830.

MacCarthy, Fiona. *Byron: Life and Legend*. John Murray, 2002.

Martin, John. *An Account of the Natives of the Tonga Islands, Compiled and Arranged from the Extensive Communications of Mr. William Mariner*. 2vols. London: John Murray, 1817.

McGann, Jerome. *Fiery Dust Byron's Poetic Development*. U of Chicago Press, 1968.

McKusick, James. "The Politics of Language in Byron's *The Island*." *English Literary History*, 59 (1992): 839-856.

McLynn, Frank. *Captain Cook: Master of the Seas*. Yale UP, 2011.

Minutes of the Proceedings of the Court-Martial Held at Portsmouth, August 12, 1792. with and Appendix. London, 1794.

The New Monthly Magazine and Literary Journal. vol.8, London, 1823.

The New-York Review and Atheneum Magazine. no. xi. April 1826. New-York.

O'Connell, Mary. *Byron and John Murray*. Liverpool UP, 2014.

Oxford Dictionary of National Biography online. <https://www.oxforddnb.com/20220910>

Peale, Anne. "Authorship and Authority in Sir John Barrow's Narrative of the Mutiny on HMS 'Bounty.'" *Book History*, Vol. 19 (2016): 197-213.

Sahlins, Marshall. *Islands of History*. University of Chicago Press, 1985.

Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Ed. Michael Mason. 2nd ed. Longman, 2007.

石倉和佳 「死者の漕ぐ船：コーレルリッジの「老水夫の歌」と太平洋航海」『カルチュラル・グリーン』第5号 BOOKWAY 2024年 79-102.

石倉和佳 「18世紀末から19世紀初頭のハワイ諸島における病と死ーハワイはいかに語られたか」『兵庫県立大学環境人間学部報告』第24号 2022年 101-115.

石倉和佳 「バンクーバー航海記 (1798) にみる太平洋の人々」『カルチュラル・グリーン』
第4号 BOOKWAY 2023年 59-80.

“Pitcairn: The Island of Fear.” *Independent*, 19th November 2006.

<https://www.independent.co.uk/news/world/australasia/pitcairn-the-island-of-fear-424862.html>
20260220